

実態のない世界を、 どの目線から見つめる ～ネット社会 私なりの

高校時代の友人から、大学のミスコンのファイナリストに選ばれたという知らせを聞いたとき、私はうれしいと同時に不安な気持ちを抱いた。

というのも、ミスコンの投票はインターネット上から誰でもできるWeb投票が主流であり、自己アピールの場もTwitterやInstagramなどのSNSに重きが置かれているため、ネット上での立ち居振る舞いが非常に重要視される。

友人は頻りにSNSを更新するタイプではないし、ネット上で行われる他者との独特な距離感でのやり取りにも慣れていない。

SNSがPRの場として注目されるようになったのはここ数年のことだが、今やその拡散力はテレビにも負けず劣らずともいえる。とくに若者へのプロモーションには持ってこいの手段だろう。

しかし、SNSはとにかく全てが自己発信なのだ。画面の向こう側から彼女を見つける人たちは、彼女のアカウントが発信した情報だけを、彼女を構成するピースとして拾い集める。

今日あった出来事も、なにか好きなのかも、彼女自身が発信しなければ誰にも知られることはない。

直木賞作家・朝井リョウさん

の著書『何者』で、瑞月という登場人物が就活仲間に向けたこんな台詞がある。

「人生が線路のようなものだとしたら、自分と全く同じ高さで、同じ角度で、その線路を見つめてくれる人はもういないんだって。生きていくことって、きっと、自分の線路と一緒に見てくれる人数が変わっていくことだと思うの」

高校時代、きっと私は彼女と同じ目線で彼女の過程を見てきた。だから彼女がとびきりの努力家で、うれしいときに素直に喜ぶことができ、悲しいときには泣くことができる人間であることを知っている。

学生記者に なりませんか？

『HAKUMON Chuo』は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部在学生を対象に学生記者を募集しています。

【バックナンバー】



No.257
2018 夏



No.256
2018 春



No.255
2018 早春



No.254
2017 冬



No.253
2017 秋

【お申し込み・お問い合わせ】 中央大学広報室『HAKUMON Chuo』 編集担当：久保田茂信

のか 考察～

けれど彼女がこれから相手にしていく人たちは、そんなことに気づいてはくれないかもしれない。

ファイナリスト入りの報告を受けた数日後には、彼女のミスコン専用アカウントが公開されていた。

彼女は20年前からこの世に存在しているが、インターネットの世界においては呼吸を始めたばかりのまっさらな存在なのだった。

彼女のなにかがリセットされたような気がして、形容しがたい気分になった。

私がいわゆる SNS のような、ネット上のみでの他人のやり取

りに初めて触れたのは小学5年生の頃である。

当時のインターネットのコミュニケーションは今ほど開放的なものではなく、誰もが匿名で、現実世界とは切り離されていた。

現実の自分を何も知らない相手にだからこそ話せることもあった。『知られないこと』は、ネット上のコミュニケーションの利点でもあったのだ。

しかしスマートフォンが普及し、誰もが気軽にアカウントを作ることでいま現在のネット社会では、ネット上の仮想世界と現実世界の境界が曖昧になってきている。

SNS を現実世界の一部として活用する人が増えているのである。

ネットの世界は私たちのすぐそばに存在し続け、これからもっと大切なものになっていくだろう。けれど、その世界には自主的に参加しなければならない。

実態のない世界を、どの目線から見つめるのか。現代に生きる私たちは考え続けなければならないのだろう。

文&写真

学生記者 **津田 翔** (法学部2年)

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方をはじめ添削指導を受けることができます。将来どんなキャリアを目指すにも文章力が重要です！
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。



No.252
2017 夏



No.251
2017 春



No.250
2017 早春



No.249
2016 冬



No.248
2016 秋



No.247
2016 夏

Phone : 042-674-2048 (直通) E-mail : hc@tamajs.chuo-u.ac.jp